

二〇一六年九月二十日、山梨県甲府市・唐土神社、午後七時五十一分。

ジュリアの中で一時間たつぷり待つ間、佐竹は英気を養うためにひと眠りした。おかげで頭がだいぶすつきりしている。鳥居の前に立った時には内側から突風が吹き、身体を強く押し返された。歓迎されていない証拠だ。神社にはない。

中に棲む異形の者の仕業だ。佐竹は印を組みながら一礼した。参道の左側をゆっくりと進み、拜殿の前へ来て再び一礼する。用意してきた小さな幣束を立て始めるや否や、頭上に紺鼠の薄雲が垂れ込めた。外側から見れば何ら変わりのない唐土神社だが、十七本の幣束が並ぶ線のこちら側は異世界と繋がったのだ。内耳神経を引つ張られるような耳鳴りが始まり、目の前の拜殿が掻き消えていく。焼け野原が足元に拡がったかと思うと、右側にあった朽ちかけた大木は砂塵のように頽れた。八重比丘尼に違いなかった。北東の空に異様に赤く歪んだ満月が昇る。眼前に茅葺屋根を持つ小ぶりの門が立ちはだかった。艮の方角うしろかどに置かれているということは、この神社はそもそもが鬼門なのだ。檜の引き戸が固く閉ざされている。佐竹が一步下がり印を組みと引き戸はするりと開き、人ひとりが通れる幅を作った。この引き戸は開けておかなければならない。浄めが始めれば、並行世界に関わる伽陀を背負う者たちが苦しみ始める。時空が繋がった今、これを開けておけば誰かが助かるはずだ。

佐竹は敷居の上に半紙で作った人形ひとがたをふわりと置いた。それは瞬く間に地中へ花茎を伸ばし靈妙な花卉を広げ、曼珠沙華となった。

「掛巻も畏き月弓尊は上絃の大虚を主給ふ」

月待之祓を奏上する。

「月夜見尊は圓満の中天を照給ふ」

霞雲が満月を左右からゆっくりと覆っていく。

気配を感じて地面を見下ろすと、傷だらけになり血に塗れた蒼白の右手が地中から這い出して、佐竹の足首をがっしり

と挿んだ。佐竹はその場へ屈みもう一枚人形を置いた。それが曼珠沙華へと変貌を遂げる間、瘦せ細った右手は苦し気に虚空を挿んでいたが、やがて掌を天へ向け、そのまま白い彼岸花へと変わって行った。

「月読尊は下絃の虚空を知食す」

詔を上げながら佐竹は人形に息を吹きかけ、それを次々と地面へ撒いていく。どこからともなく聴こえてくる呻き声は猛り狂う劫火の音に掻き消されていき、もはや佐竹の通った跡には間髪入れずに茎を伸ばし、果てしない空間を埋め尽くす勢いで曼珠沙華が咲き誇るのだった。

「三神三天を知食と申す事の由を聞食て」

この地にはもう、誰も脚を踏み入れることはない。

「祈願圓滿感応成就無上靈法神道加持」

奏上を終えた途端、満月が再び姿を現した。象牙色の月光が赤の絨毯を照らすと生暖かい風が佐竹の頬を撫でた。雨の匂いがある。空を見上げるまでもなく、曼珠沙華の上を流れの早い雲が影を落としていくのが見えた。盆東風ぼんとうちが来る。暴風雨になる前に帰らなければ。修祓のあとは天命が最後の試みを仕掛けてくるはずだ。